総 説

臨地実習における「学生の看護上の判断」の概念分析

Concept Analysis of “Nursing Student’s Nursing Judgment” in Clinical Practice

阿部オリエ^{1),*}

Orie Abe

キーワード：学生の看護上の判断，臨地実習，概念分析

Key words：Nursing Student’s Nursing Judgment, Clinical Practice, Concept Analysis

Abstract

Purpose: This study aimed to clarify the concept of “student’s judgment in nursing” in clinical training.

Method: The authors analyzed all available papers and conducted concept analysis of it in reference to the concept analysis method of Walker & Avant.

Results: The prior requirements were categorized into [situation under clinical training], [scene that the student is involved in the subject they are taking charge of], [caring scene that the student practices], [scene that the student was troubled with judgment] and [scene that the student’s thought occurs]. Next, the attributes were categorized into [determination for understanding patient], [determination accompanied with care practice], [determination in each phase of the nursing process], [determination at a certain time point], [determination accompanying process], [student’s basic competence as a foundation of learning], [high thinking ability of the student] and [student’s competence that is immature]. Further, the conclusions were categorized into [fixing of critical thinking and nursing process thinking method], [improvement of assessment], [precise target understanding], [practice of appropriate care] and [judgment in certain situations]

Conclusion: Since there exists judgment in nursing that students feel difficulty in making themselves in “Student’s judgment in nursing in clinical training”, it is essential to support them through education. This suggests that sharing care for patients is important for developing nursing decisions such as [Determination on understanding the subject] and [Determination accompanied with care practice].

要 旨

目的：臨地実習における「学生の看護上の判断」の概念を明らかにすることを目的とした。

方法：Walker & Avant の概念分析の方法を参考に，入手可能な全ての文献を対象として分析を行い概念分析を実施した。

結果：先行要件は，【臨地実習における状況下】【受け持ち対象者との関わりの場面】【学生自身が実践するケア場面】【学生自身が判断に困った場面】【学生自身の思考が始まる場面】に分類された。次に，属性は，【患者を理解した上での決定】【ケア実施に伴う決定】【看護過程の各段階における決定】【一時点における決定】【プロセスを伴う決定】【学習の土台となる基本的な学生自身の能力】【高度な学生自身の思考能力】【未熟な学生自身の能力】に分類された。また，帰結は，【クリティカルシンキング・看護

受付日：2020年6月17日 受理日：2020年10月5日

1) 日本赤十字九州国際看護大学 Japanese Red Cross Kyushu International College of Nursing

* E-mail: o-abe@jrckicn.ac.jp

過程の思考法の定着】【アセスメントの向上】【正確な対象理解】【適切なケアの実践】【状況における判断】に分類された。

考察：臨地実習における「学生の看護上の判断」には、決定の範囲があるということ、一時点における決定とプロセスを伴う決定があるということ、影響を与える学生自身の能力が存在するという3つの特徴があると考えられた。また、【患者を理解した上での決定】と【ケア実施に伴う決定】は、患者の存在無くしては学ぶことのできない看護上の判断と考える。

結論：臨地実習における「学生の看護上の判断」には、学生自身で獲得することが困難な看護上の判断もあるため、教育による支援が不可欠であるといえる。中でも、【患者を理解した上での決定】や【ケア実施に伴う決定】といった看護上の判断を育成するには、患者へのケアを共有することが重要であることが示唆された。

I. はじめに

看護系大学においては、育成すべきコアコンピテンシーとして、「必要とされる看護を判断すること」といった、学生自身で看護上の判断ができるようになることが喫緊の課題といえる。学生の臨床判断に関する研究も散見されるようになった（相野・森山，2011；山内ら，2015）が、臨床判断は、達人〔Expert〕に特有な意思決定や直観的というような感覚的な特徴がある（Benner et al., 1996；Tanner, 1990, 2006）ことから、学生には備わっていない能力と考える。そこで、看護系大学生に対して、学生のうちに育成すべき看護上の判断があると考えた。先行研究によれば、学生の看護上の判断に関する研究は、布佐（1999）や鶴田（2010）の研究に示されるように、学生が判断に困難を感じる場面における教育の在り方を検討したものであった。一方、学生の臨床判断能力を上げるには、シミュレーションや concept を設定し、ルーブリック評価を活用することが効果的とされている（Lasater, 2011）が、臨地実習の場における患者への学生の看護上の判断に着目した研究は見あたらない。さらに、学生の看護上の判断育成にあたり、その概念が必ずしも共通理解されている状況とは言い難い。そこで、臨地実習における「学生の看護上の判断」の概念分析に取り組んだ。

II. 研究目的

臨地実習における「学生の看護上の判断」の概念を明らかにする

III. 研究方法

Walker & Avant の概念分析の方法（Walker & Avant, 1995, 2005/2008 pp. 89-122）を参考に概念分析を実施し

た。分析の手続きとしては、1. 概念を選択する、2. 分析の目的を決定する、3. 選択した概念を定義づける属性を明らかにする、4. 先行要件と帰結を明らかにするという4つの手法に着目し概念分析を実施した。

まず、分析する概念を「学生の看護上の判断」とし、臨地実習の場に限定した。次に、分析の目的を、臨地実習における学生の看護上の判断とは何かを文献検討により明確にし、臨地実習の場で育成すべき「学生の看護上の判断」を明らかにすることとした。データ収集は、入手可能な文献全て（辞典、書籍、先行研究論文、総説、資料等）を対象として分析を行った。先行研究論文について海外対象文献の選定は、データベースとして「CINAHL」および「PubMed」を用いて「nursing judgment」および「clinical judgment」、さらに「nursing student」をキーワードに、査読有の学術論文検索を行った結果11件の文献が検索された（2020年4月19日検索）。これらの文献の要旨を参照し、該当した7文献を対象文献とした。加えて、看護師を対象とした「臨床判断」についての主要文献として、Benner, Tanner の文献を追加した。追加した理由は、看護の領域における「臨床判断」は、主に看護師を対象としている文献が圧倒的多数を占め、「看護師の臨床判断」として定義されているからである。さらに、「学生の臨床判断」は、「看護師の臨床判断」の定義がそのまま引用されていることが多いという理由もある。また、国内対象文献の選定は、データベースとして、「医中誌 Web (Ver. 5)」および「J Dream III」、'CiNii'を用いて「看護上の判断」「学生」をキーワードに文献検索を行った。対象の文献は5件であり、文献の内容を精読した結果、該当した文献は僅か2件であった。そこで、「学生の看護上の判断」と意味内容が類似する、もしくは包含すると考えられる「学生」「判断」「臨床判断」「思考」「思考過程」をキーワードにして、再度文献検索を行った。その結果、対象文献は36文献であった。さらに、辞典

等を追加し、総対象文献数は58件となった。その後、反復的に検討し、対象概念がもつ属性を明確化し、概念の要素や特性を明らかにすると共に、対象概念の先行要件や帰結を明確化した。その際、該当する記述内容についての著者の主張や表現を可能な限りそのまま残すようコード化し、意味内容ごとの抽出を行った。

Ⅳ. 結 果

臨地実習における「学生の看護上の判断」の先行要件（表1）、属性（表2）、帰結（表3）をまとめた。以下、それぞれの詳細を示す。

1. 臨地実習における「学生の看護上の判断」の先行要件

表1に示す通り先行要件は、【臨地実習における状況下】【受け持ち患者との関わりの場面】【学生自身が実践するケア場面】【学生自身が判断に困った場面】【学生自身の思考が始まる場面】というカテゴリーに分類された。

2. 臨地実習における「学生の看護上の判断」の属性

表2に示す通り属性は、コードが多数であるため、内容ごとに分けてカテゴリー化した。その結果、8つのカテゴリーが抽出された。以下、詳細を示す。属性として、【患者との距離感】【患者の現在と今後を予測した上での理解】を包含した【患者を理解した上での決定】、【ケアの有無に対する決定】【ケアの方法に対す

る決定】を包含した【ケア実施に伴う決定】が抽出された。また、【看護過程の第一段階〈アセスメント〉に伴う決定】【看護過程の第三段階〈計画立案〉に伴う決定】【看護過程の第四段階〈実施〉に伴う決定】【看護過程の第五段階〈評価〉に伴う決定】を包含した【看護過程の各段階における決定】、【二者択一における決定】【解釈】【結論付ける】【推理・推論】【仮説の設定】【根拠の明確化】【情報の活用】【状況・問題の認識】を包含した【一時点における決定】、【看護過程の全段階において生じる決定のプロセス】【思考のプロセスに含まれる決定】【気づき、解釈、反応、省察という決定のプロセス】を包含した【プロセスに伴う決定】が抽出された。さらに、【知識・技術の活用】【現象の明確化】【資質】【気づき】【学生に可能な決定】【経験】【理解】【修正】【主体的に学ぶ力】を包含した【学習の土台となる基本的な学生自身の能力】、【省察】【矛盾のない説明】【直観】【概念形成】【熟考に基づく決定】【科学的思考】を包含した【高度な学生自身の思考能力】、【困難に感じる学生自身が決定できる範囲】【自信のないことへの決定】【不足している知識】【不足している直観】【経験による決定の乏しさ】【未熟な看護技術】【意図的な情報収集の乏しさ】【検証能力の乏しさ】【手がかりの少なさ】【情報の識別不足】【ケア選択肢の不足】を包含した【未熟な学生自身の能力】が抽出された。

3. 臨地実習における「学生の看護上の判断」の帰結

表3に示す通り帰結は、【クリティカルシンキング・看護過程の思考法の定着】【アセスメントの向上】【正

表1 概念分析による臨地実習における「学生の看護上の判断」の先行要件

先行要件	コード	文献
臨地実習における状況下	臨床実習	中野ら（1997）
	臨床における状況下	Corcoran, S. A.（1990b）
受け持ち対象者との関わりの場面	手術患者の受け持ち	小澤ら（1995）
	患者との相互作用場面	坂口ら（1996）
	受け持ち患者に対する関わり	黒田ら（2005）
	排泄ケア場面	今井ら（2007）
学生自身が実践するケア場面	移乗・移動の援助を行う際の安全や残存機能への着目	平川ら（2016）
	学生が注目したケア場面	今井ら（2007）
	学生自身が実践するケア	中野ら（1997）
	受け持ち患者の看護を実施する際に生じる現象	鶴田（2010）
	学生の行動	坂口ら（1996）
	学生が健康生活に関する援助の実施	布佐（1999）
学生自身が判断に困った場面	学生が判断に困った実習場面	鶴田（2010）
	学生が臨床実習中に看護上の判断に困難を感じる場面	布佐（1999）
学生自身の思考が始まる場面	臨地実習における学生の思考	鎌田（2004）
	臨床判断に影響している学生の思い	塩月ら（1996）
	情報の取得	上杉ら（1998）

表2 概念分析による臨床実習における「学生の看護上の判断」の属性

属性	内容	コード	文献
患者を理解した上での決定	患者との距離感	学生がいだく患者像	上杉ら (1998)
		患者との関係の築き方	布佐 (1999)
		患者への接近感	塩月ら (1996)
		患者への思い入れ	塩月ら (1996)
		患者の喜びに対する思い	塩月ら (1996)
		患者との対応の決定	鶴田 (2010)
	患者の現在と今後を予測した上での理解	患者への接し方	布佐 (1999)
		患者の行動を促す動機づけ	中野ら (1997)
		患者の現状・以前と現在の比較・予測される変化(将来)の存在	中野ら (1997)
		問題を解決するための方法を決定するにあたり、いくつかの選択肢を考え、どの方法をとればどのような結果になるかを判断すること	中野ら (1997)
		患者が期待することの認識	Corcoran, S. A. (1990b), 中野ら (1997)
		患者の言動の奥に潜む患者心理	中野ら (1997)
		対象者の問題を解決しようとする	今井ら (2007)
		対象者の抱える問題点や課題	石川 (2015)
		対象者の強み	石川 (2015)
ケア実施に伴う決定	ケアの有無に対する決定	行動を取るかとらないかという決定	Corcoran, S. A. (1990a)
		ケアの判断	鶴田 (2010)
		援助の決定	布佐 (1999)
		ケアの実施についての決定を下すこと	小澤ら (1995)
		患者ケアについて決定を下すこと	布佐 (1999)
		ケア行動の選択	今井ら (2007)
	ケアの方法に対する決定	ケア実施の必要性の有無	鶴田 (2010)
		ケアをどのように実施するかについての決定を下すこと	小澤ら (1995)
		標準的なアプローチをそのまま使用するか、または変更するかを決めること	Corcoran, S. A. (1990a)
		対象者の反応に伴うケアの決定	必要であれば、新しいものを即座に考えて行うことの決定を患者の反応により決めていく行為 Corcoran, S. A. (1990a)
看護過程の各段階における決定	看護過程の第一段階〈アセスメント〉に伴う決定	アセスメント	鶴田 (2010)
		患者や家族が示す状況の認識評価	布佐 (1999)
		患者の状況の観察・アセスメント	小澤ら (1995)
		看護過程の第1段階は情報の収集と分析(アセスメント)である。情報とは判断を下したり行動を起こしたりするために必要な種々の媒体を介しての知識とされる	坂下ら (2017)
		①情報収集+②情報をもつ意味=③アセスメント	内田 (2013a)
	看護過程の第三段階〈計画立案〉に伴う決定	アセスメントとは解釈、判断、推理、推論である	黒田 (2012), 黒田 (1998)
		計画立案	内田 (2013b)
	看護過程の第四段階〈実施〉に伴う決定	実施	内田 (2013b)
		評価	内田 (2013b)
	看護過程の第五段階〈評価〉に伴う決定	①情報のinput+②臨床的判断力 clinical judgment =③評価 assessment	内田 (2013a)
一時点における決定	二者択一における決定	学生が効果的であろうと考えて実施したケアによっておこった患者の変化に対する判断	中野ら (1997)
		異常と正常	黒田 (1998)
		異常なデータの発見	Rosalinda A. L. (2006)
		逸脱した現象に着目	藤内・宮腰 (2005)
		基準からの逸脱の有無の判断	松木 (2007)
		そうである、そうでないという判断	齋藤・内田 (2004)
		正しい、正しくないという判断	齋藤・内田 (2004)
		よいか悪いかの白黒を判定すること	齋藤・内田 (2004)
		問題の有無	黒田 (1998)
		どうなっているか、その要因は何か、今後どのようなことが生じうるかについて考えたこと	石川 (2015)
	解釈	事象の解釈内容	上杉ら (1998)
		患者のニーズ、心配事、または健康問題についての解釈や結論	Corcoran, S. A. (1990a)
		意味のあるデータかどうかの判断	Rosalinda A. L. (2006)
		観察の解釈	今井ら (2007)
		収集した情報が示す意味を解き明かす	貝瀬・真野 (2011)
		解き明かした意味を言語化する	貝瀬・真野 (2011)
	結論付ける	各データの意味を解釈	松木 (2007)
		結論付ける	貝瀬・真野 (2011)
	推理・推論	情報の意味からひとまずの決定をすること	黒田 (1998)
		逸脱がない場合、強化の必要の有無の判断	松木 (2007)
		推論	鎌田 (2004)
		事実に基づく推論	深田ら (2010)
	仮説の設定	クリティカルに推論を行うことが必要	石川 (2015)
		逸脱がある場合、情報の推理から予測される問題や力を判断	松木 (2007)
		自分の考えを仮説として明確化	内田 (2013b)
		患者が示す状態の可能性を仮説として導くこと	深田ら (2010)
	根拠の明確化	最も確率が高い仮説の選択と他の仮説を棄却するプロセスでの判断	深田ら (2010)
		当て推量ではなく証拠に基づいて判断を下す	Rosalinda A. L. (2006)
		事実との一致	石川 (2015)
	情報の活用	判断の基準や根拠を明確にする	貝瀬・真野 (2011)
		キュー(証拠)が多いほど正確な判断が行える	Rosalinda A. L. (2006)
	状況・問題の認識	過去に得た情報と現在の情報が一緒になり新たな情報として活用された	上杉ら (1998)
		患者や家族が示す状況の認識	布佐 (1999)
		問題の認識	内田 (2013b)

表 2 (続き)

属性	内容	コード	文献
プロセスを伴う決定	看護過程の全段階において生じる決定のプロセス	看護過程の原理に基づく 意思決定と判断は看護過程の全段階に固有のもの 看護過程の全段階(アセスメント、問題点の抽出、看護計画立案、実施、評価)で行うこと	Rosalinda A. L. (2006) 齋藤・内田 (2004) 石川 (2015)
	思考のプロセスに含まれる決定	「手がかり」→「疑問」→「疑問解決のための確認」→「仮説」→「仮説の検証」→「意図した関わり」→「関わった効果の確認」 注目(サイン)→疑問→疑問の解決→推測→推測に関する検証→意図した関わり→関わった効果の確認	坂口ら (1996) 坂口ら (1996)
	気づき、解釈、反応、省察という決定のプロセス	対話を通した気づき→解釈→反応→省察	Corcoran, S. A. (1990a), Corcoran, S. A. (1990b), 松谷ら (2015)
		知識 援助技術に関する知識 物品の取扱い 「援助技術に関する知識」は画一化した活用と複数の知識を組み合わせた活用が存在する 患者を観察した結果と学生自身の周期看護に関連する知識との照合 知識の再確認 「事象の解釈内容」は学生が実習中の経験を通して得た実践的知識の特徴をもつ 理論的知識と実践的なノウハウの相互作用 その場面に応じて効果的なかわりを予測し実践するための知識・技術を活用しようとする能力	黒田ら (2005) 上杉ら (1998) 鶴田 (2010) 上杉ら (1998) 深田ら (2010) 岡崎ら (2014) 上杉ら (1998) 布佐 (1999) 中野ら (1997)
学習の土台となる基本的な学生自身の能力	現象の明確化	Skill (技術) 看護現象の明確化	Lasater, K. (2007) 岡崎ら (2014)
	資質	感情 感性 Aptitude (適性) Confidence (自信)	黒田ら (2005) 黒田ら (2005) Lasater, K. (2007) Lasater, K. (2007)
	気づき	対話を通した気づき	Corcoran, S. A. (1990b)
	学生に可能な決定	意思決定 自分の考えを決定すること	齋藤・内田 (2004) 鶴田 (2010)
	経験	Experience (経験)	Benner, P. et al. (2009), Lasater, K. (2007), 黒田ら (2005)
	理解	理解	鎌田 (2004)
	修正	修正	内田 (2013b)
	主体的に学ぶ力	学ぶ力 観察や実験で自ら情報収集を行うという主体的な活動が求められる 対象者と自己との関係を発展させる 援助者としての自己と向き合う 援助者としての責任感 自分を役立てたい思い 看護実践を通して得た看護の実感や発見に基づいた、学生の看護に対する考え方の広がり	山内ら (2015) 内田 (2013b) 今井ら (2007) 今井ら (2007) 塩月ら (1996) 塩月ら (1996) 中野ら (1997)
	省察	自己の看護能力を分析する 自己モニタリング 自己開示 看護のあり方 よりよい看護への積極性	今井ら (2007) 黒田ら (2005) 黒田ら (2005) 布佐 (1999) 塩月ら (1996)
	矛盾のない説明	矛盾のない説明を行うこと	石川 (2015)
	直観	直観を働かせる	Benner, P. et al. (2009), Rosalinda A. L. (2006)
	概念形成	概念形成などの機能を含む 複雑な内的過程を経て判断や行動が行われる ある状況に対して反射的に反応するのではない 状況判断力	鎌田 (2004) 鎌田 (2004) 鎌田 (2004) 黒田ら (2005)
	熟考に基づく決定	認知的な熟考によるケア行動の決定要素	今井ら (2007)
	科学的思考	問題解決 科学的方法の原理に基づく	鎌田 (2004) Rosalinda A. L. (2006)
高度な学生自身の思考能力	困難に感じる学生自身が決定できる範囲	学生が実施する範囲の決定 学生としての立場の意識 学生が一人でどこまでしてよいか 看護者との対応	鶴田 (2010) 塩月ら (1996) 鶴田 (2010) 鶴田 (2010)
	自信のないことへの決定	看護師の存在に対する思い 教師との考えの違いをどのようにするか 他者からの助言	塩月ら (1996) 鶴田 (2010) 上杉ら (1998)
	不足している知識	知識不足 病態の知識不足 実践的知識に違いがある 根拠のない想像や思い込み 過去の知識が乏しい	鶴田 (2010) 藤内・宮腰 (2005) Tanner, C. A. (1982) 藤内・宮腰 (2005) 布佐 (1999)
	不足している直観	看護師の臨床判断と比較して直観の用い方に違いがある	Tanner, C. A. (1982)
	経験による決定の乏しさ	過去の経験に乏しい	布佐 (1999)
	未熟な看護技術	看護技術の未熟さ	塩月ら (1996)
	意図的な情報収集の乏しさ	何を観察するかを選択 情報収集の仕方	今井ら (2007) 鶴田 (2010)
	検証能力の乏しさ	手がかり (cues) の使い方が結びつけ方が非効率的 仮説検証の能力が非効率的 踏み込んだ検証がない	布佐 (1999) Tanner, C. A. (1984) 藤内・宮腰 (2005)
	手がかりの少なさ	手がかりの情報量が少ない 患者の言葉に限定された手がかり	藤内・宮腰 (2005) 藤内・宮腰 (2005)
	情報の識別不足	情報間の関係性の理解不足 情報の重要性が識別できない	藤内・宮腰 (2005) 布佐 (1999)
	ケア選択肢の不足	看護行為の選択肢が少ない 患者に応じた看護行為が困難 患者の個性の認識不足	藤内・宮腰 (2005) 藤内・宮腰 (2005) 藤内・宮腰 (2005)

表3 概念分析による臨地実習における「学生の看護上の判断」の帰結

帰結	コード	文献
クリティカルシンキング・看護過程の思考法の定着	対象者の解決すべき問題を明らかにする	坂下ら (2017)
	自ら考え判断する科学的思考の定着＝看護過程の思考法の定着	内田 (2013b)
	看護過程の展開	齋藤・内田 (2004)
	看護におけるクリティカルシンキングの実施	Rosalinda A. L. (2006), 石川 (2015)
アセスメントの向上	アセスメントの視点が明確となる	石川 (2015)
	分析的なアセスメントができる	黒田 (2012)
	情報の持つ意味の明確化	齋藤・内田 (2004)
正確な対象理解	患者理解やケアが適切かを決定する重要な根拠となる	貝瀬・真野 (2011)
	患者に関するデータ収集と分析・統合	松木 (2007)
適切なケアの実践	適切な援助を提供する	坂下ら (2017)
	正しいケア実践	内田 (2013a)
	ケアにおける判断	中野ら (1997)
状況における判断	状況における判断	中野ら (1997)
	患者のみに偏る状況判断	中野ら (1997)

図1 臨地実習における「学生の看護上の判断」の概念分析

正確な対象理解】【適切なケアの実践】【状況における判断】というカテゴリーに分類された。

以上の結果より、臨地実習における「学生の看護上の判断」の概念分析の先行要件、属性、帰結を図1にまとめた。

V. 考 察

臨地実習における「学生の看護上の判断」の概念分析の属性に着目すると、次の3つの特徴があると考えられた。まず、学生の看護上の判断には、決定の範囲があるということ、次に、一時点における決定とプロセスを伴う決定があるということ、最後に、影響を与える学生自身の能力が存在するというものである。以下、この3つの特徴についての詳細を述べる。

まず、1つ目の特徴として、臨地実習における「学生の看護上の判断」には、決定の範囲があるということである。臨地実習における「学生の看護上の判断」の属性として抽出された、【患者を理解した上での決定】【ケア実施に伴う決定】【看護過程の各段階における決定】というカテゴリーに示されるように、学生は、何らかの範囲において決定を下すことが述べられていた。ここで述べた何らかの範囲とは、患者を理解することやケアの実施および看護過程の各段階を指す。

次に、【一時点における決定】と【プロセスを伴う決定】が存在するというものである。この、一時点における決定とは、表2に示した通り、[二者択一における決定]や、[解釈]、[根拠の明確化]といったような、ある一時点における決定を示している。一方、プロセスを伴う決定とは、[看護過程の全段階において生じる

決定のプロセス]、[気づき、解釈、反応、省察という決定のプロセス]に示されるように、看護過程においては、アセスメントにおける決定が、次の段階である問題点の抽出における決定につながるなど、次の段階に影響を与えている決定や、[思考のプロセスに含まれる決定]である。

3つ目の特徴として、臨地実習における「学生の看護上の判断」には、影響を与える学生自身の能力が存在するという事である。すなわち、臨地実習における「学生の看護上の判断」という概念には、【学習の土台となる基本的な学生自身の能力】と、【高度な学生自身の思考能力】が含まれるということである。その一方で、【未熟な学生自身の能力】も存在することが明らかとなった。

このように、臨地実習における「学生の看護上の判断」には、【高度な学生自身の思考能力】が求められたり、【未熟な学生自身の能力】に示されるような、学生自身で獲得することが困難な看護上の判断が存在すると考えられた。そのため、学生には困難とされる看護上の判断が学生自身でできるようになるためにも、教育による支援が不可欠であるといえる。本研究結果より得られた知見として、臨地実習における「学生の看護上の判断」には、決定の範囲があること、一時点における決定とプロセスを伴う決定があること、影響を与える学生自身の能力が存在することが明らかとなった。これらのことより、学生の看護上の判断を育成するには、上記3つの特徴をふまえた上で、学生に関与することが重要であると考えられる。本概念分析によって抽出された【看護過程の各段階における決定】や【一時点における決定】【プロセスを伴う決定】については、学内のシミュレーターやコンセプトを設定した上での学習も可能であるといえる。しかし、【患者を理解した上での決定】と【ケア実施に伴う決定】は、人である患者の存在無くしては学ぶことのできない看護上の判断と考える。そのため、分析の目的の一つであった、臨地実習の場で育成すべき「学生の看護上の判断」とは、【患者を理解した上での決定】と【ケア実施に伴う決定】であるといえる。布佐（1999）は、学生が患者を知る段階において判断困難な場合、臨地実習指導者が、状況を洞察することを助けることの重要性を指摘した。一方、岡田（2020）は、学生は、経験と内省を繰り返すことで、臨床判断の拠り所となる考え方を習慣化し定着させ自分のものにしていくと指摘している。これら先行研究の結果より、学生が臨床判断を行

う際、状況を洞察したり、経験と内省を繰り返す必要があることが明らかにされた。本研究で使用した看護上の判断は、類似概念として臨床判断を位置づけている。そのため、【患者を理解した上での決定】や【ケア実施に伴う決定】といった学生の看護上の判断も、状況の洞察や経験と内省が必要となる可能性が高い。Atkins, & Murphy（1993）が述べたとおり、状況の洞察や内省は、起こったことや場面を想起することが前提となる。しかし、患者と関わることやケアに必死になっている学生にとって、起こったことや全ての場面を想起することは困難であり、学生だけの能力で遂行できるものではないと考える。そのため、臨地実習における【患者を理解した上での決定】や【ケア実施に伴う決定】といった看護上の判断を育成するには、学生と患者へのケアを共有しながら想起を促すことができる教育者の存在が不可欠であると考ええる。

VI. 結 論

1. 臨地実習における「学生の看護上の判断」の先行要件は、【臨地実習における状況下】【受け持ち対象者との関わり場面】【学生自身が実践するケア場面】【学生自身が判断に困った場面】【学生自身の思考が始まる場面】に分類された。次に、属性は、【患者を理解した上での決定】【ケア実施に伴う決定】【看護過程の各段階における決定】【一時点における決定】【プロセスを伴う決定】【学習の土台となる基本的な学生自身の能力】【高度な学生自身の思考能力】【未熟な学生自身の能力】に分類された。また、帰結は、【クリティカルシンキング・看護過程の思考法の定着】【アセスメントの向上】【正確な対象理解】【適切なケアの実践】【状況における判断】に分類された。

2. 臨地実習における「学生の看護上の判断」には、決定の範囲があるということ、一時点における決定とプロセスを伴う決定があるということ、影響を与える学生自身の能力が存在するという3つの特徴があると考えられた。臨地実習における「学生の看護上の判断」には、学生自身で獲得することが困難な看護上の判断もあるため、教育による支援が不可欠であるといえる。中でも、【患者を理解した上での決定】や【ケア実施に伴う決定】といった看護上の判断を育成するには、学生と患者へのケアを共有しながら想起を促すことができる教育者の存在が不可欠であると考ええる。

付記：本論文の内容の一部は、第38回日本看護科学学会学術集会において発表した。また、本研究は、2019年度日本赤十字九州国際看護大学大学院看護学研究科共同看護学専攻博士課程学位論文の一部を加筆・修正したものである。

謝辞：本研究を進めるにあたり、一貫して緻密かつ丁寧に指導いただきました日本赤十字九州国際看護大学大学院看護学研究科共同看護学専攻博士課程、教授、本田多美枝先生に深く感謝いたします。

利益相反：本研究における利益相反は存在しない。

文 献

- 相野さとし、森山美知子 (2011)：終末期看護場面におけるシミュレーション学習法を用いた実習前の学生のレディネス向上と臨床判断の育成に関する効果の検討の試み、日看教会誌, 21(2), 45-56.
- Atkins, S., Murphy, K. (1993): Reflection; A review of the literature. J. Adv. Nurs., 18, 1188-1192.
- Benner, P., Tanner, C., Chesla, C. (1996): Expertise in nursing practice: Caring, clinical judgment and ethics, New York, Springer.
- Benner, P., Tanner, C., Chesla, C. (2009)／早野 ZITO 真佐子 (2015)：ベナー 看護実践における専門性 達人になるための思考と行動, 医学書院, 東京.
- Corcoran, S. A. (1990a)：看護における Clinical Judgment の基本概念, 看研, 23(4), 351-360.
- Corcoran, S. A. (1990b)：Clinical Judgment の教育と研究の動向, 看研, 23(4), 361-370.
- 深田順子, 熊澤友紀, 吹田麻耶, 他 (2010)：看護基礎教育における周術期の臨床判断力の向上を目指した教育実践, 愛知県大看紀, 16, 31-39.
- 布佐真理子 (1999)：臨床実習において看護学生が看護上の判断を感じる場面における指導者の働きかけ, 日看科会誌, 19(2), 78-86.
- 平川美和子, 須崎友里子, 吉田尚代, 他 (2016)：老年看護学実習における学生の臨床判断能力の分析—移乗・移動動作に焦点をあてて—, 弘前医療福大紀, 7(1), 39-47.
- 今井宏美, 井上映子, 大谷真千子, 他 (2007)：老年看護学実習における学生の臨床判断の特徴—排泄ケア場面の分析—, 千葉衛短大紀, 26(1), 105-109.
- 石川ふみよ (2015)：看護過程の解体新書, 学研メディカル秀潤社, 東京.
- 貝瀬友子, 真野響子 (2011)：看護学生のための疾患別看護過程 Vol. 1 よくわかる BOOK, メヂカルフレンド社, 東京.
- 鎌田美智子 (2004)：臨地実習における看護学生の思考の特徴—「思考過程の分析枠組み」と「思考パターンの類型」による分析, Qual. Nurs., 10(2), 51-63.
- 黒田裕子 (1998)：第1章看護過程を理解するために, 黒田裕子, 事例で学ぶ 看護過程実践マスター, 8-11, 日総研出版, 名古屋市.
- 黒田裕子, 棚橋泰之, 原田竜三, 他 (2005)：成人看護学実習における看護学生の思考発展に関する研究—2 学生の実習記録から見た分析を通して—, 日赤大紀, 19, 20-34.
- 黒田裕子 (2012)：しっかり身につく看護過程, 照林社, 東京.
- Lasater, K. (2007): High-Fidelity Simulation and the development of clinical judgment: Students' experiences, J. Nurs. Educ., 46(7), 269-276.
- Lasater, K. (2011): Clinical judgment: The last frontier for, Nurse Educ. Pract., 11(2), 86-92.
- 松本光子 (2007)：ケーススタディ看護過程 根拠に基づく看護診断から評価まで, 医学書院, 23-32.
- 松谷美和子, 三浦友理子, 奥裕美 (2015)：看護過程と「臨床判断モデル」, 看教, 56(7), 616-622.
- 中野静子, 上杉純美, 酒井淳子, 他 (1997)：看護学生の臨床判断に関する研究—臨床判断の内容と教育的かかわり—, 愛媛医療技短大紀, 10, 21-30.
- 岡田摩理 (2020)：領域別看護学実習の経験の積み重ねにより臨床判断に必要な思考方法を学生が獲得していくプロセス, 日看教会誌, 3, 1-13.
- 岡崎美智子, 道重文子, 石垣恭子, 他 (2014)：看護過程を基盤として臨床判断力を育成する学習支援システムの開発, 第15回日医療情報学会会論集, 178-180.
- 小澤桂子, 佐藤まゆみ, 水野照美, 他 (1995)：手術患者を受け持つ学生の看護上の判断に関する研究, 日看教会誌, 5(2), 44-45.
- Rosalinda, A. L. (2006)／江本愛子, 本郷久美子 (2009)：基本から学ぶ看護過程と看護診断, 医学書院, 東京.
- 齋藤悦子, 内田陽子 (2004)：看護過程学習ガイド 思考プロセスからのアプローチ, 学習研究社, 東京.
- 坂口千鶴, 平田暁子, 伊藤美也子, 他 (1996)：4年制大学の看護基礎教育における学生の看護アセスメント能力の実態, 日看教会誌, 6(2), 89.
- 坂下貴子, 茂野香おる, 後藤奈津美 (2017)：看護過程展開の技術, 系統看護学講座 専門分野 I 基礎看護学 [2] 基礎看護技術 I, 226-239, 医学書院, 東京.
- 塩月ぬい子, 濱田弘子, 中野静子, 他 (1996)：学生の臨床判断に影響する因子—学生の思いに焦点をあてて—, 愛媛医療技短大紀, (9), 21-30.
- Tanner, C. A. (1982): Instruction in the diagnostic process: An experimental study, In Kim, M. J., Moritz, D. (Eds.), Classification of nursing diagnoses: Proceedings of the Third and Forth National Conferences, p. 145-152, McGraw-Hill, New York.
- Tanner, C. A. (1984): Stages of Development in Diagnostic Expertise: Characteristics, Constraints, and Strategies, In Miller, D.T., Diagnostic Reasoning in nursing, p. 57-104, J. B. Lippincott Company, Philadelphia.
- Tanner, C. A. (1990)／堀内成子, 片田範子 (1990)：クリニカルジャッジメントの教育—文献検索—, 看研, 23(4), 118-131.
- Tanner, C. A. (2006): Thinking like a nurse: A research—Based model of clinical judgment in nursing, J. Nurs. Educ., 45(6), 204-211.
- 鶴田晴美 (2010)：看護学生が判断に困った実習場面における学生と指導者が認識した教授活動, お茶の水看誌, 5(1), 25-40.
- 藤内美保, 宮腰由紀子 (2005)：看護師の臨床判断に関する文献的研究—臨床判断の要素および熟練度の特徴—, 日職災医会誌, 53(4), 213-219.
- 上杉純美, 中野静子, 酒井淳子, 他 (1998)：看護学生の臨床

判断に活用された情報, 愛媛医療技短大紀, 11, 1-9.
内田陽子 (2013a): 看護アセスメント力鍛え方&教え方, 日
総研出版, 名古屋市.
内田陽子 (2013b): ペストティーチャーが教える! 看護過程
目からウロコの教え方&学び方, 日総研出版, 名古屋市.
Walker, L., Avant, K. (2005) / 中木高夫, 川崎修一 (2008): 看護

における理論構築の方法, 医学書院, 東京.
山内栄子, 西園貞子, 林優子 (2015): 看護基礎教育における
臨床判断力育成をめざした周手術期看護のシナリオ型シ
ミュレーション演習の効果の検討, 大阪医大看護誌, 5, 76-
86.